

もじばら

第31号

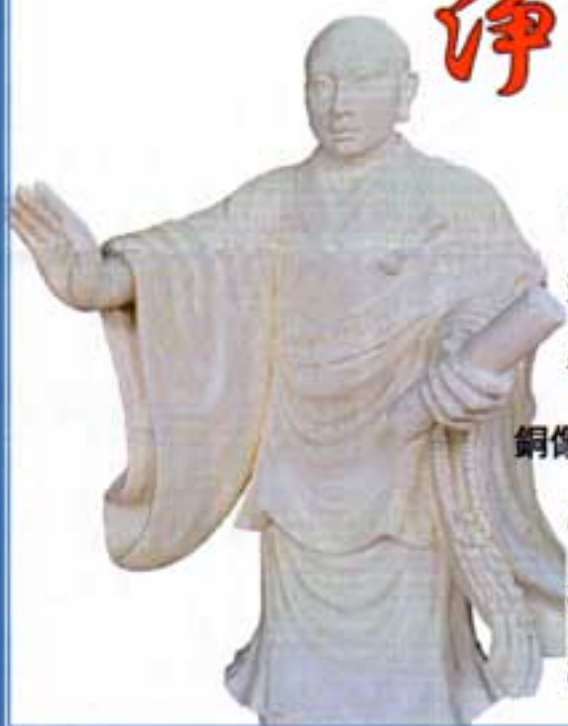
平成二十五年は、第二祖日向聖人の七百遠忌です。題字・持田日勇貫首殿下

発行日 平成25年5月25日

発行所 千葉県茂原市茂原 1201
日蓮宗東身延 本山藤原寺
TEL 0475-22-3153
発行責任者：増田 寶泉 総務執事

掲示板

日蓮大聖人大銅像建立 浄財勸募中



日蓮大聖人の大銅像を建立致します。

当山の檀信徒並びに

各寺院の御住職、檀信徒の皆様方、

銅像建立に賛同していただいける方々

のご協力を心よりお待ちしております。

お早めにお申し込み下さいますよう

お願い申し上げます。

貫首様のお言葉



身延山と蕨原寺

門祖日向上人は建治二年（一二七六）二十四歳の時、日蓮聖人の代参として清澄山に詣りて道善御房の墓におまいりし、報恩抄を奉納してまいりました。

帰路茂原の地に至り、開堂供養の御本尊を奉じて蕨原寺法華堂の開眼法要を奉行しました。その時に日蓮聖人が授けられた山寺号は「常楽山妙光寺」であります。（注）

その時以来蕨原寺は日蓮聖人を初祖とし、日向上人を二祖としていますが、当山では日向上人が二祖として法燈を継承したのは、弘安五年（一二八二）日蓮聖人がご入滅の後、三十歳の時であるとしております。

日向上人は弘安八年（一二八五）に身延山に登り学頭職につかれました。

そして正応元年（一二八八）日興上人の身延離山後、身延山第二世の法燈を継承しました。三十六歳の時であります。

日向上人は正和二年（一二三三）六十一歳の時、身延山第三世の法統を弟子三位房日進上人に譲り茂原に隠棲しました。

蕨原寺は日向上人が身延に赴いた後、弟子丹波阿闍梨日秀上人に託されましたが、寺伝によれば日秀上人は在位二十年、建武元年（一二三四）の入滅とあり、したがって日秀上人が第三世の法統を継承したのは正和三年（一二三四）日向聖人滅後ということになります。よって日向上人は蕨原山には三十二年間在住し、身延山には二十五年間在住して、身延山と蕨原山を二十六年に亘って兼務したことになり、身延と蕨原を隔月に往復したといわれています。よって蕨原山を東身延といえます。

日向上人の法統は日向門流といい、身延山では「身延門流」といいますが、茂原ではそれを「蕨原門徒」といいます。

両山一体の古文書の全文を写すことにします。由緒書 上総国殖生郡蕨原 妙光寺

一、拙寺は宗門最初の霊場にて建長五年之夏日蓮聖人の開基

一、久遠寺拙寺両寺一寺之事

二祖日向聖人祖師入滅之後此聖人久遠寺妙光寺三十二年の間兼帯身延山の節は身延にて大会執行仕又蕨原在山の節は蕨原にて執行仕今以古例に任せ斯山に違年之両度大会式小会式身延同様にて執行仕候

一、元祖分骨妙光寺に安置の儀は〇〇相承黒箱秘法両山一寺之伝法故分骨有之候

一、三祖日秀聖人此聖人之儀は日蓮之弟子高橋入道之息子にて兄弟二人兄を日秀弟を日進と申す即ち兄の日秀蕨原之三祖弟之日進身延の三祖にて両山一寺三代之由緒如此御座候

一、身延蕨原於両山黒箱之相承は祖師日蓮之伝法両山住寺之外披見難成此書日向聖人蕨原在職之内元祖より授与之書にて唯今身延の黒箱相承は蕨原より相伝候 宝徳二年三年の間に相承請訳書は身延に送り本書は蕨原に伝来仕候得者却て蕨原は法理根本之由緒に御座候

一、拙寺伽藍建立之最初は日蓮の弟子大勢集まり建立之事往古之日記に有之候

一、元祖より日向聖人江授与之大本尊は蕨原に納め有之候両山一寺之由緒末代に打〇絶無之様、蕨原一大事伝法は身延に納め身延の一大事大本尊は拙寺に納り有之候

一、寛文中不受不施異流之寺院有之候節も及言上身延拙寺共〇に罷出対論被仰付邪法執行之寺院夫々に御仕置候 仰付其後元禄年中悲田不受不施再犯之時も久遠寺拙寺同様四ヶ年在府丹精仕敷度及言上御停止被成下候

一、権現様より御朱印頂戴仕御代々御朱印被成下候

一、養珠院様御祈禱被仰付御願成就之節御自ら御禱被遊候七條袈裟衣被下置候
一、年頭御礼往古より正月六日登城御礼相務来候者厳有院様御台様天下安全御祈禱正月六日より十五日迄被仰付候に付六日之御礼廿八

日に相務申候。(注厳有院・家綱公)

一、久遠寺住持万一法義違背仕候節は拙寺より相札候事は古來之留書所持仕候其上近年久遠寺日唱も法義違背仕候節妙光寺は不罷出候得共拙寺宝蔵入之書を以御掛り牧野越中守様江差上其書之趣にて日唱異流齋願仕置仰付候右之通御座候以上

妙光寺

この古文書は身延山の除歴日唱について触れられているので安永(一七七二〜一七八〇)以後のものであらうと思えます。

薬原寺の歴世の中、第五代日海上人は身延一山の学頭として学識高く著述も多く薬原教を大成されたとされています。しかし才幹勝れ、自他宗を遷はず勧導し金六万貫を得て薬原寺に「金塔」を建立しましたが、他宗の信徒からも財施を受けたとして身延七世日觀上人に喚ばれて非難されました。

第六代日悟上人は日海上人の弟子で「このことを深く含み、一門徒を起こして身延より独立せんと企てしが、寺衆分裂して果たせず、身延に謝した」と身延山史にあります。第七世日証上人は小松原鏡忍寺の歴代であります。

第十三世日典上人は塚原根本寺の十一世であり、京都妙覚寺の二十世でもあります。

第十五世慈雲院日新上人は身延山に昇つて第十七世となりました。

第十八代蓮葉院日東上人は小西檀林第六世の学頭で飯高檀林の講主でもありました。元和年中(一六一五〜一六三三)に当山に住し、

以後不受不施派を一掃して池上十八世となりました。

第二十代日還上人は京都妙伝寺十三世であります。

この頃までは身延と薬原及び他の本山との交流が盛んであったのが窺われます。

その後、慶安年中(一六四八)から元禄年中(一六八八)にかけて薬原寺に対する小西檀林の専有が始まりましたが、薬原寺は天明六年(一七八六)の末寺帳によれば百二ヶ寺という末寺を抱え、門流の流れが広く浸透していったのであらうと思えます。

それは身延でも同じであつて第十一世行学院日朝上人が中興の業績を上げ、延山教学を大成し、その門下が継承者として身延門流の発展に努め、薬原から昇つた第十五世日新上人や十九世日道上人以降身延門流の流れが大きく広がっていったとは言え、十四世日鏡上人が西谷檀林の基を作り、その出身者が身延の歴代に就任するとともに、三十一世日脱上人以来飯高檀林の支配が始まり、今日まで至っています。しかしその底流には脈々と日向門流の法流が継承されているのであります。法縁専有の残滓が未だ鮮明で有るとはいえ、宗門の発展を考える上で、やがて昔日の如き交流が復活していくものと思えます。

注、『後に後醍醐天皇から「常在山」という山号を戴き、徳川幕府から「薬原の寺」と称され、寺号が薬原寺と変わりました。』

行事記録

御頭講会

(平成二十五年一月十四日)

当山貫首持田日勇親下を大導師、一乘院御山主内山榮邦僧正と実相寺御山主晶山慈浄僧正を副導師に御頭講会を厳修いたしました。御頭講会とは、日蓮聖人に新年のご挨拶を申し上げる年頭の法要です。

法要は裏千家鶴沢宗良様による献茶に始まり、増田総務による当山と身延山にのみ伝わる御頭講会の縁起由来が述べられ、貫首親下による鳴弦の儀が行われました。説経の後、御山前にて松本博子様と長谷川さやか様兩名による『伊予漫才』の舞が奉納されました。

法要後に曳馬式が行われ、日蓮聖人が非常に大切になされたと伝えられる栗鹿毛の馬に貫首親下を筆頭に好物の人参を食べさせました。





節分追儺会

(平成二十五年二月三日)

当山貫首持田日勇親下を大導師に、午後二時より節分追儺会を厳修致しました。節分は立春の前日として旧暦の大晦日にあたり、この日に厄難を払い年中安泰を祈ります。今年も多くは年男福女の方が参加し、福茶献上を鶴岡宏洋様、福豆献上を鈴木勇次様が行い、誓詞を白井治定様が言上しました。読経の後、参加した年男福女に修法師による福祿倍増、年中無難の祈捧が行われました。法要終了後、大堂前に作られた棧敷より貫首親下の「福は内」のかけ声と共に福豆やお菓子、景品番号が書かれたボールが年男福女より撒かれ、景品交換が行われました。本年は天気もよく日曜日ということもあり、例年に比べ非常に多くの参拝者が訪れ賑わいました。

東日本大震災三回忌追悼法要

(平成二十五年三月九日)

当山貫首持田日勇親下を大導師に、午後二時半より大堂に於いて東日本大震災の第二回忌追悼法要を厳修致しました。副導師には千葉西部宗務所長土井了真僧正、千葉西部宗会議員大塩孝信僧正、式衆には千葉西部管内各聖が出仕をしました。

追悼法要には多くの方が参列し、読経唱題の響く堂内で焼香合掌し、震災によって亡くなられた方々の御冥福と被災地の復興が速やかに達成されるよう祈りました。

法要終了後、堂内に設置されたスクリーンに被災地の様子が映し出されました。震災から二年経った今も未だ復興が進まない現状を見て多くの人が衝撃を受けていました。また大堂前にて東日本大震災孤児支援募金活動が行われ、十万六千五百円集まりました。



花祭り

(平成二十五年四月七日)

当山貫首持田日勇親下を大導師に、午前十一時より大堂にて釈尊降誕会を厳修致しました。本年は天候不順により稚児行列は中止となりましたが、全十五名の天童稚児が参加し、花御堂に設けられた誕生仏に灌仏、献灯や献華をして釈尊の御降誕をお祝いしました。灌仏で甘茶をかけるのは、釈尊が誕生された際、産湯を使わせるために九匹の竜が天から清浄の水を注いだとの故事に由来するためです。

花祭りコンサート

(平成二十五年四月七日)

花祭り後の午後一時より仏殿にて花祭りコンサートを開催致しました。本年も「ブーケ・ドウ・トン」の方々には演奏をして頂きました。ヴィヴァルディの四季をはじめ様々な曲が演奏され観客はその音色に耳を傾けました。また復興支援ソングである「花は咲く」を観客と共に歌い被災地の復興を祈りました。

